間語リ考
――能〈藤〉における間狂言の役割――

田崎未知

はじめに

能〈藤〉は、狂言方の扮する所の者が、ワキの扮する僧の問いに答えて、シテの扮する役にまつわる物語の補足解説を行う「間語リ」をする。そしてこの「間語リ」によって、この能の主題となる和歌とその作者が提示される。すなわち、能〈藤〉は間狂言の介在によって本説を明らかにし[1]、曲全体の統一がなされているのである。本稿では、宝生・観世両系の詞章比較をしながら、能〈藤〉において間語リの果たす役割と間狂言台本の詞章比較を検討していきたい。本稿執筆にあたり謡曲本文は、宝生系の吉川本[2]を用いる。比較対照として、観世系は観世流現行本を収める謡曲大観[3]を用いる。

能〈藤〉は江戸中期の作で、観世・宝生・金剛の三流で演じられる。宝生のものが原作とされ[4]、観世では明和二（一七六五）年刊行の『明和改正謡本（以下明和本と略す）』に諸所改定を施して現行曲として取り入れられ[5]、金剛流は明治期に現行曲として取り入れられた。流儀により本文異同が激しいのが特徴である。この能は『万葉集』の内蔵忌寸縄麻呂の「多祜の浦の　底さへにほふ　藤波を　かざして行かむ　見ぬ人のため[6]」という詠歌が、一応の本説と見なされている。この能において本説の認定が困難なのは「藤を詠んだ佳句の群れに主題歌が埋没して」いるためである[7]。

能〈藤〉のような二場物の夢幻能は、ワキの登場――シテの登場――ワキとシテの応対――シテの物語・シテの仕事――シテの中入の五段構成を前場に取り、後場もこれに準ずる。構成の中心は、前場のシテの物語（故人の霊やシテの扮する物の精などの昔語り）と後場のシテの仕事（過去の仕方話の再現や舞働）である。[8] 通常は構成の中心において本説が明らかとなるが、能〈藤〉は詩歌の引用が長く、いくつもの歌が朗詠されるため本説の認定が難しくなっている。そこで重要な役割を果たしているのが間狂言である。[9]

一　能〈藤〉の物語の構成とその背景

まず能〈藤〉の物語の構成について見ていきたい。物語の構成には次の三つの要素が挙げられる。

i　物語の要点となる素材の選択……素材を配列する。

ii　登場人物の選定……登場人物を相互に関係づける。

iii　登場人物の行動……登場人物を動かし物語を展開させる。

ワキの都方の僧が、越路（現在の北陸道）経由で善光寺に向かう。道行文は、修辞技巧を駆使した名所尽くしにより、旅の道筋や経過を表している。都方の僧は加賀国高松から能登国石動山を過ぎ、越中国氷見の里に到着する。

ことば「急候程に。是は、や越中（の）国くずみの郡氷見の里に着て候。又あれ成湖は。承及たる多枯の浦にて在げに候。立寄一見せばやと思ひ候。誠に承及たるよりは見事成湖水のけしきにて候物かな。是成松にまとへる藤の。今を盛と見え候はいかに。下（詠吟）／常盤成、松の名立（たて）にあやなくも。ことば「懸れる藤の咲て散哉。古事（ル）の思ひ出（で）られて候　《宝生系「吉川本」》

湖に面している「多枯（ママ）の浦」という場所や、「松にまとへる藤」は物語の要点となる素材の一つである。能の物語の多くは、旅人であるワキがある所に行きかかり、故人の霊や物の精であるシテと出会うところから始まる。ここでワキは、シ

テを導き出すための役割を果たし、物語が展開するのである。

二　地方喧伝の能と本説

多祐の浦[10]を訪れ、松に巻きつく藤を見て、ワキ僧は「常磐成[11]」の古歌を口ずさむ。この歌に詠まれる藤は、松の緑の美しさを評判するための添え物に過ぎない。数ある藤を詠んだ歌の中から、わざわざ不適の作をワキ僧に吟じさせたのは、シテを登場させるためのきっかけを作るためである。ワキ僧の口ずさんだ古歌は、藤にとって聞き捨てがたい内容であった。ここでシテである女（藤の精）が登場し、不名誉な歌を吟じたワキ僧を「荒（ママ）御心なの事や候」と非難する。

して女「なふ（う）〳〵あれ成旅人に申べき事の候、わき「此方の事にて候か荒（ママ）思（ママ）じ寄ずや候、して「是は田子の浦とて藤花（トウクワ）（傍訓下村本）の名所なれば。古人の世に一首の切（ママ）哥の多き中にも。思ひぞ出（づ）る。下（詠吟）／田子の浦や、汀の藤の咲しより。うつらふ浪ぞ色に出（で）けると。ことば「か様の哥を詠じ給はで。松のなたてと口ずさみ給ふは。下（拍子不合）／荒（ママ）御心なの事や候、

《宝生系「吉川本」》

シテは「田子（ママ）の浦や[12]」の歌を始め、『万葉集』や『和漢朗詠集』、『後拾遺和歌集』などから詩歌を引用する。

世阿弥は『風姿花伝』第六において、能の作劇にあたり、素材典拠が有名な「本説」が不可欠であることを記している[13]。

殊更、脇の申樂、ほんぜつ正しくて、かいこより、その謂れと、やがて人の知る如くならんずるらい歴を書くべし。……《中略》……假令、名所・舊跡の題目ならば、その所によりたらんずる詩歌の、言葉の耳近からんことを、能の詰め所に寄すべし。爲手の言葉にも風情にもかからざらん所には、肝要の言葉をば載すべからず。……《中略》……しかれば、よき能と申は、本説正しく、珍しき風體にて、詰め所ありて、懸り幽玄ならんを、第一とすべし。

「本説」の正しさは、世阿弥以後の能の作者たちにとっても重要なものであった。能〈藤〉は「藤」や「多枯（ママ）の浦」とい

う名所を、物語の要点となる素材にしている。そのため、「藤」や「多枯（ママ）の浦」について詠じた詩歌などで、よく知られたものを、一曲の眼目に配して記す必要がある。能〈藤〉の舞台であり、越中国の歌枕である多祜の浦は布勢の水海に面していた。布勢の水海は、国守大伴家持らがしばしば清遊してその美しい景観を褒め称え、「遊二覧布勢水海一賦」と題する有名な長歌も残している。特に、天平勝宝二（七五〇）年四月十二日に家持ら数人の官人たちが「十二日、遊二覧布勢水海一、船二泊於多祜湾一、望二見藤花一」と歌を競作し、多祜の浦の藤の花について詠み交わした。この歌群の影響から多祜の浦は藤の名所として定着した。

ワキ僧の古歌について非難したシテは、『万葉集』の縄麻呂の歌「多祜の浦の　底さへにほふ　藤波を　かざして行かむ見ぬ人のため」を引く。この歌は、前述の大伴家持らの布勢水海遊覧の際に競作された歌の一つである（傍線は私による）。

して／敷島に、同上（歌）／田子の浦、底さへ匂ふ藤浪を。〳〵、かざして　ゆかん。見ぬ、人の為と読置し。

《宝生系「吉川本」》

かの縄麻呂の歌に　地上歌『多祜の浦。底さへ匂ふ藤波を。底さへ匂ふ藤波を。かざして行かん。（と少し正面に出で）。見ぬ人のためと詠みたりし。

《観世流『謡曲大観』》

宝生系の吉川本では「敷島に」とあるだけで、引用した和歌の作者について一切言及せず、観世流では和歌の作者を「縄麻呂」と明確に記している。この両者の違いについて、明和二（一七六五）年刊行の明和本に理由を求めることができる[14]。

明和二年、十五世観世太夫元章は二一〇番に及ぶ曲目の選定ならびに詞章の大幅な改定を行った。この明和本の制作を命じたのは、江戸中期の歌人・国学者であり御三卿田安家の初代当主である田安宗武であることが分かっている。明和本は、宗武と和学御用として召し抱えられていた賀茂真淵と、真淵の門人である加藤枝直も加わって改訂が行われた。このため明和本の詞章は、国学の影響を受けた復古的色彩が強く、観阿弥・世阿弥以降の全謡本の史実や文法など、あらゆる

面から考証された。宝生系の謡本では言及されなかった和歌の作者について、観世流の謡本で明確に記しているのは、改訂に伴う引用和歌原典の明確化と宝生系詞章との差別化が考えられる。一方、宝生系の謡本では明確に記されているのに、観世流の謡本では記されていない詞章もある。能〈藤〉のワキの登場の「名ノリ」を次に引用する（傍線は私による）。

ことば「是は都方より出（で）たる僧にて候。吾此程は賀州に下り。あしの篠原安宅の松。爰かしこの名所を一見仕て候。亦是より能劔に下り。それより善光寺へ参らばやと思ひ候、　《宝生系「吉川本」》

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。われこの程は加賀の國に候ひて。ここかしこの名所を一見仕りて候。又これより善光寺へ参らばやと思ひ候　《観世流『謡曲大観』》

「名ノリ」は、身分紹介――経過説明――行動予告の三段構成を取る。宝生系の吉川本は、善光寺に向かうまでの旅の道筋を、通過する土地土地の名前を詠み込んだ連鎖型の掛詞によって表している。都方のワキ僧は、加賀国の篠原、安宅の松などを一見し、能登国を経由して善光寺へ向かおうとしていることが記されている。一方、観世流の謡曲大観では「ここかしこの名所を一見仕りて」とあるだけで、具体的な旅の道筋を明らかにしていない。

上（歌）／雪消る、白山風も長閑にて。〳〵、音高松の浪までも。治る道に戸ざしはせぬ、石動山を杉村や。青葉に見ゆる紅葉川。そなたと計白雲の。緬々行（け）ばくれ切る。氷見の里にも着にけり、〳〵。　《宝生系「吉川本」》

ワキ道行『雪消ゆる。白山風ものどかにて。白山風ものどかにて。日影長江の里も過ぎ。ささぬ刀奈美の關越えて青葉に見ゆる紅葉川。そなたとばかりの白雲の。氷見の江行けば名に聞きし。多祜の浦にも、着きにけり多祜の浦にも着きにけり　《観世流『謡曲大観』》

「道行」は謡事小段の一種で、地名を中心に旅の経過を謡う。宝生系の吉川本は、加賀国の白山、高松を越え、能登国の石動山を経て氷見に至る。一方、観世流の謡曲大観では、加賀国の白山、「日影も長」しに掛けた長江の里を過ぎ、「ささぬ」戸に掛けた越中国の刀奈美の關（砺波山にある関）、氷見の江を通り、多祜の浦に至る。宝生と観世の旅程の差異を簡

単にまとめると、宝生系のワキ僧は能登路経由の北回りで氷見の里へ至り、観世流のワキ僧は能登路を経由しない南回りで多祜の浦へと至るのである。松浦静山著『甲子夜話続篇』十二に「其後可順〔御数寄屋坊主〕が話に、この謡は小松中納言の作なり。因てその領分の中の名所、田子の藤のことに寄せて謡を作られしと。」の記述がある。[15] 能〈藤〉は、名ノリや道行の詞章などに加賀国や能登国の地方喧伝ともいうべき詞章が見られる。また、加賀宝生との関わりから、「小松中納言」こと加賀藩第三代藩主である前田利常の名が挙げられたものと推測される。このことから能〈藤〉の作者は、北陸地方にゆかりのある人物であることが推測される。[16]

能〈藤〉の物語に戻る。ワキ僧はシテが古歌についてあまりにも詳しく物語るので、いよいよ不審に思い、「くるれば露の古事を。語れる人は誰やらん」と、シテに正体を尋ねる。正体を尋ねられたシテは、自分の正体をほのめかして中入をする。その後、狂言師が扮する所の者が登場する。

三　能〈藤〉間狂言本の成立時期

狂言師は二場物の能において、前シテの退場後、後シテの登場までの間をつなぐアイの役を担ってきた。間狂言本は狂言師の備忘のための書留で、ほとんどの間狂言本がアイの語りだけを記している。シテやワキ、ツレなどと交渉を持って物語の進展に加わる「アシライ間」でも相手のセリフは「シカ〳〵」と書かれ、具体的に記されていないのが普通である。

能〈藤〉の間狂言本の詞章は、江戸初期の西村弥三左衛門写あるいは所持とされる『筑波大学本』[17]や、貞享二（一六八五）年の松井兵右衛門写『貞享松井本』[18]、貞享四（一六八七）年の鞍貫勘四郎写『貞享鞍貫本』[19]、『山脇和泉家伝来九冊組間狂言本（通称「共同社本」）』[20]などの大蔵系間狂言本には記載がない。これは能〈藤〉の成立がこれらの間狂言本より後年のためだと推測される。能〈藤〉間狂言詞章の初出は、鷺伝右衛門派の弟子家である名女川家の五代辰三郎によって宝暦十一（一七六一）年頃に成った『宝暦名女川本』である。

四　間語リの役割

能〈藤〉のような二場物の夢幻能における間狂言は、アイの登場――アイとワキの応対――アイの仕事・シテにまつわる物語――アイの退場の四段構成を取る。能〈藤〉の間狂言は、シテの扮する役にまつわる物語を、ワキの問いに答えて語り聞かせる「間語リ」で展開する。

アイ扮する所の者が、藤の盛りを眺めにやって来る。ワキ僧が多祜の浦の「松にまとへる藤」のいわれを尋ねると、よくは知らないがと言いつつも、奈良の帝の昔から、歌に詠まれた名花であることを教える。ワキ僧が、藤の精に会ったことを述べると、所の者はしばらく逗留してありがたい経を読誦し、重ねて奇特を待ちなさい、と言い置いて去る。

北川忠彦氏は『初期間狂言の形態』で間語リについて「能の前段と後段、つまりシテの扮装替への時間のつなぎに過ぎず、しかもそのカタリの内容は、大體に於て前段の繰返しに過ぎない」と、間語リが前場の「シテの物語」の再話に過ぎないことを指摘している[21]。江戸中期の作とされる能〈藤〉の間語リは、本説を明らかにする役割を担っている。本曲の間語リは、単なる前段の再話ではなく、曲全体の統一を果たす役割を担っている。

／先此湖（ミヅウミ）を不勢の湖と申候。又是成松に掛りたる藤を、田子の浦藤と申て名花にて候、夫に付【多胡の浦】田子の浦藤と申子細は、昔奈良御帝（カト）の御時大伴（トモ）の家持（ヤカモチ）の卿、越中の守にて御座有し時、此所へ御出有、様々御遊覧、の折ふし、此藤今を盛りと咲乱候を御覧有、春の名残をいとゝ（とと）おもはせ給ひ御寵愛被成御酒宴有たると承りて候、去程に此藤の花是成汀に影移り、水底（ミナソコ）清く見へ候程に、一首の御詠歌に、藤波の、影成海の底清み、しづく石をも玉と我か見ると遊れけれは、其時御供に候ひし奈和丸（ナハマロ）と申御方取あへす、田子の浦、底さへ匂ふ藤波を、かさして行む見ぬ人の為と讀せ、給ひしより、此所を田子の浦と申し、夫より是成る藤を田子の浦藤と申習し候、　《和泉流『得平本』[22]》

アイ扮する所の者により、新たに大伴家持の詠歌と多祜の浦が藤の名所となった由などが語られる。前場におけるシテは、これらの事柄について触れていない。前場におけるシテの語りだけでは、大伴家持らの歌群により多祜の浦が藤の名

所となった由を知ることはできない。前場と後場を繋ぐ間狂言の間語リによって、これらのことが明らかになるのである。間狂言が能の核を成す素材を提示し、縄麻呂の「多祜の浦の」の詠歌が本説であることを明らかにしているのである。

五　能〈藤〉間狂言の詞章比較

狂言台本の特徴として、時代による変動の幅や流派間の差異が、能の謡本とは比較にならないほど大きいという点が挙げられる。能の場合、演技や演出面において大きな違いや変化があっても、台本の異同の幅は通常きわめて小さい。狂言の場合、江戸初期頃から流派意識の高揚などにより、次々と各家で台本が筆録されるようになった。その結果、同じ曲目でもセリフをはじめ、登場人物の名称や人数、物語の筋などに異同が見られるようになった。間狂言は能の一部であることから、おおよその内容は能作者の指定を受けただろうが、狂言師が独自に創意を加えたりする部分もあったと見られる。

能〈藤〉の本説は、『万葉集』の内蔵忌寸縄麻呂の詠歌であることが、間狂言の介在によって明らかにされる。間狂言本の詞章比較を行ったところ、この和歌の作者「縄麻呂」に二通りの表記が見られた（傍線は私による）。

①其時御供に候ひし奈和丸（ナハマロ）と申御方取あへす.　《和泉流『得平本』》
②其の時御供に候ひしなは丸と申す御方の取敢へず。　《和泉流『狂言集成本』[23]》
③御供にありし名和丸と申す人とりあへず。　《大蔵流『森川杜園本』[24]》
④其時御伴ひ候ひし縄丸と申御方ハ。越中の亮にておわしけるが取敢ず。　《鷺流『若林本』[25]》
⑤其時御伴ひ候ひし網丸と申御方ハ越中の亮にておわしけるが取敢ず　《鷺流『安藤本』[26]》
⑥其時御伴なひ候ひし網丸と申御方ハ。越中の亮にておわしけるが取敢ず。　《鷺流『天田本』[27]》

得平本「奈和丸（ナハマロ）」、狂言集成本「なは丸」、森川杜園本「名和丸」などは音写による同音異字といえる。安藤本「網丸」、天田本「網丸」などは「縄」が字形のよく似た「網」に誤写されて「網丸」になった、視覚的誤写といえる。宝生系の詞

章では他に引用される和歌と同様に作者について触れていない。観世流の詞章における縄麻呂の言明は明和本の改正時の措置と思われ、能〈藤〉の本説の和歌の作者について言明するのは、本来アイの役割であったと考えられる。また和泉流や大蔵流の間狂言本では縄麻呂の役職についての言及はないが、鷺流では「越中の亮」とされている。これは史実的には誤りである。

大伴家持や縄麻呂らの布勢水海遊覧の際に競作された歌以降、多祜の浦や藤が、越中国を代表する歌枕となって後世の歌人たちに歌い継がれ、数多くの歌集に登場したことが紹介される。

①田子(ママ)の浦．底さへ匂ふ藤波を．かさして行む見ぬ人の為と讀せ．給ひしより．此所を田子(ママ)の浦と申し．夫より是成る藤を田子の浦藤と申習し候．

《和泉流『得平本』》

②多枯(ママ)の浦。底さへ匂ふ藤浪を。かざしてゆかん見ぬ人の為と。詠ませ給ひしより。此の處を多枯の浦と申し。それよりこれなる藤を。多枯の浦藤と申しならはし候

《和泉流『狂言集成本』》

③多祜の浦底さへ見ゆる藤波をかざして行かん見ぬ人のためと。かやうに詠まれたると申す。

《大蔵流『森川杜園本』》

④多枯(ママ)の浦底さへ匂ふ藤波を。かさして行ん見ぬ人のためと読給ひしより。此所を多枯の浦とも。又多枯の浦ふし共申由承及ひて候。

《鷺流『若林本』》

⑤多枯(ママ)の浦底さへ匂ふ藤の花かさして行ん見ぬ人の為とよみ玉ひしより此處を多枯の浦とも又多枯の浦藤とも申由承り及て候

《鷺流『安藤本』》

⑥多枯(ママ)の浦底さへ匂ふ藤波を。かざして行ん見ぬ人の為。と詠ミ給ひしより。此所を多枯の浦とも。又多枯の浦藤とも申由承り及て候。

《鷺流『天田本』》

和泉流では縄麻呂の歌の影響により、この地を「田子(ママ)の浦」と、藤の花を「田子(ママ)の浦藤」と言い習わすようになったこ

とが語られる。大蔵流では、歌の紹介のみで、多祜の浦や多祜の浦藤については触れられない。鷺流では縄麻呂の歌の影響により、この地を「多枯(ママ)の浦」とも「多枯(ママ)の浦藤」とも呼ばれるようになったことが語られる。

万葉歌人の大伴家持やその詠歌について、宝生系詞章や観世系詞章などでは触れられない。間狂言によって初めて、家持の詠歌「藤波の　影なす海の　底清み　沈く石をも　玉とそ我が見る」[28]や多祜の浦藤との関わりが紹介される。

①しかのみならす家持の卿は．万葉集の作者と聞ゆる哥人にて御座候．故其後代々の集にも．田子(ママ)の浦ふじと讀たる哥．あまた有よし承り及て候．　《和泉流『得平本』》

②しかのみならず。家持の卿は。萬葉集の作者と聞こゆる歌人にておはします故。其の後代々の集にも、多枯(ママ)の浦藤と詠みたる歌は。數多ある由聞及びて候。　《和泉流『狂言集成本』》

③それより帝にも。多祜の浦と申す御歌數多く御座ある由承り候。　《大蔵流『森川杜園本』》

④誠に何国の藤よりもしなひ永く別して色深く。世々の集の歌人も数多詠置れたると申習由。　《鷺流『若林本』》

⑤誠に何国の藤よりもしなひ永く別して色深く世々の集めの歌人も数多詠置れたると申習す　《鷺流『安藤本』》

⑥誠ニ何国の藤よりもしなひ永く別して色深く。代々の集の歌人も数多詠置れたる由承る。　《鷺流『天田本』》

ここでの間語リの役割は地方喧伝である。和泉流では、多祜の浦の藤が万葉歌人の家持の影響により後世の歌人たちにも歌い継がれ、数多くの歌集に登場したことが紹介される。大蔵流では、多祜の浦が帝の詠歌にも数多く登場することが紹介される。鷺流では、どこよりも多祜の浦の藤の花房が長く色が深いため、後世の歌人たちにも歌い継がれ、数多くの歌集に登場したことが紹介される。

シテにまつわる謂れなどをワキ僧に対して物語る間語リの終盤においても、流派間の詞章の差異が見られる。

①唯今は遠國(ヲン)の事なれは．誰見る人もなく候．か様の物語も．古き人の申傳たる斗に候／最前申如く委敷は存せす候へ共先我等の承り及たる通御物語申て候が扨お尋は如何様成御事にて候そ　《和泉流『得平本』》

②唯今は遠國の事なれば誰れ見る人もなく候。か様の物語も古き人の申傳へたるばかりにて候。最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。先づ我等の承及びたる通り御物語申して候が。さてお尋ねはいか様なる御事にて候ぞ。

《和泉流『狂言集成本』》

③遠國の事なれば誰見る者もなく候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

《大蔵流『森川杜園本』》

④併遠国の事なれバ。誰有ツ（て）打続き詠ずる人もなく。毎年我等如きの見申迄にて委細の事ハ存せず候が古き者共の申傳る通りを。先物語り仕りたるが。何と思召てお尋ありたるぞ不審に存候

《鷺流『若林本』》

⑤併遠国の事なれバ誰有つて打続き詠する人もなく毎年我等如きの見申迄にて委細の事ハ存ぜず候が古き者共の申傳へ通りを先物語仕たるが何と思召て御尋有たるぞ不審に存候

《鷺流『安藤本』》

⑥乍併遠国の事なれバ。誰有ツて打続き詠ずる人もなく。毎年我等如きの見申迄にて。委細の事ハ不存候が。古き者共の申傳る通りを。物語り仕りたるが。何と思召て御尋被成たるぞ。不審ニ存候

《鷺流『天田本』》

和泉流や大蔵流では、都から遠く離れているため多祜の浦藤を誰も見る者がいないことが語られる。鷺流では、都から遠く離れているため、多祜の浦の藤についてうち続き詠じる者がいなくなったことが語られる。

アイ扮する所の者は、ワキ僧が藤の精と出会ったことを聞き、藤の精が姿を現した理由を推量し、重ねて奇特を待つよう言い置いて退場する。

①／是は奇特成事を承り候者哉．某推量仕るにお僧の御心中貴うましますにより御法（ノリ）を請佛果（クハ）を得んと思ひ此花の精女（ワンナ）と現れ　声言葉をかはしたると存候聞．今宵は此所に御逗留有．有かたき御経をも御とくしゆなされ．重て奇特を御覧あれかしと存候

《和泉流『得平本』》

②／これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧のご心中貴うましますにより。御法を受け佛果を得ん

と思ひ。此の花の精女と現れ。聲言葉を交したると存じ候間。今宵は此の處に御逗留あり。有難き御法をも御讀誦なされ。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候。　《和泉流『狂言集成本』》

③狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては藤の精人間と現れ。御物語致したると存じ候間。暫く御逗留あり。草木成佛の御法をなし。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候　《大蔵流『森川杜園本』》

④是ハ奇特成事仰らる、物哉。当浦ハ代に隠れなき藤の名所なるに貴きお僧此辺へ御越成され。浦の気色を詠め給ひ。殊に此藤に心を付られたるにより。非精とハ申ながら此藤に限り。古へより様々哥にも詠み置れたる程の。名高き今に□せぬかつらなれバ佛果の縁をなし度存。仮に女と現じ。詞を替したると存する間。暫く是に御逗留あり。草木国土悉皆成仏の御法を遊ハし。重て奇特を御覧あれかしと存ずる　《鷺流『若林本』》

⑤是ハ奇特なる事を仰らる、物かな当浦ハ世に隠れなき藤の名所なるに貴きお僧此辺え御越なされ浦の気色を詠め玉ひ殊に此藤に心を付られたるに依非精とハ申なから此藤に限り古えより様々哥にも詠置れたる程□の名高く今に絶せぬかつらなれハ佛果の縁を印度存仮に女と顕じ詞を替したると存る間暫く是に御逗留あり草木国土悉皆成仏の御法を遊ハし重て奇特を御覧あれかしと存する　《鷺流『安藤本』》

⑥是ハ奇特成事を仰らる、物かな。当浦ハ世ニ隠れなき藤の名所なるに。貴きお僧の此辺へ御越被成。浦の気色を詠め玉ひ。殊ニ此藤ニ心を付られたるニ依。非精とハ申乍ら此藤ニ限り。古へより様々哥にも詠ミおかれ。今ニ名高きかつらなれバ。佛果の縁をなし度存。仮ニ女と現じ。詞を替したると存る間。草木国土悉皆成仏の御法をあそバし。重て奇特を御覧あれかしと存る　《鷺流『天田本』》

和泉流では、アイ扱する所の者はワキ僧の心中が尊いため、成仏の証果を得るために藤の精が女の姿で現れたと推量し、「有かたき御経」を読誦するよう勧める。大蔵流では、僧の徳については触れず、草木のようなものでも仏性を具えており成仏できるとする「草木成仏」の御法を捧げるよう勧める。鷺流ではアイ扱する所の者は、多祜の浦が藤の名所である

ため「貴きお僧」がやって来て、有名な「常盤成[29]」の古歌を口ずさむなど、藤に心をつけられたために藤の精が女の姿で現れたと推量する。そして、古くから歌に詠まれてきた名高い「此藤に限り」、成仏の証果を得るために藤の精が女の姿で現れ、無心のものすべて仏性を具えていて成仏できるとする「草木国土悉皆成仏」の御法を捧げるよう勧める。

間狂言本の書写に関し、和泉流『得平本』や『狂言集成本』では音写による同音異字が数多く見られた。鷺流の『若林本』、『安藤本』、『天田本』では、よく似た字が宛てられる視覚的誤写が数多く見られた。台本の筆録のあり方が、時代や流派によって異なることが考えられる。

また本文異同から、和泉、大蔵、鷺の流派間の差異をはっきりと読み取ることができる。和泉流の間語リでは、多祜の浦という地方喧伝に力が入れられている。間語リによって多祜の浦の藤が、万葉歌人の家持によって詠まれ後世の歌人にも影響を及ぼしたことが語られる。大蔵流では、多祜の浦が帝の詠歌にも数多く登場することが紹介されるが、和泉流や鷺流の間語リと比べると地方喧伝色が薄い。鷺流では多祜の浦藤の賛美に力が入れられている。多祜の浦藤の花房がどこよりも長く色が深いため、後世の歌人たちにも歌い継がれ、数多くの歌集に登場したことが紹介される。また和泉流では現在の多祜の浦藤について「唯今は遠國（ラン）の事なれは．誰見る人もなく候」と述べている。これに対し鷺流では「併遠国の事なれバ。誰有ツ（て）打続き詠ずる人もなく」と、都から遠く離れているため多祜の浦藤について歌を詠む人がいなくなったと述べている。鷺流では多祜の浦藤という名花の喧伝に力を入れているといえよう。

おわりに

能〈藤〉は地方色の濃い能である。このことは宝生系の名所づくしの道行文などからも明らかである。能〈藤〉の間狂言は本説の提示と地方喧伝という二つの重要な役割を担っている。間語リによって、本説和歌の作者名や多祜の浦が藤花

の名所となった由来、万葉歌人大伴家持との関わりなどが明らかにされる。

江戸前期に大蔵虎明が著した狂言の芸道論である『わらんべ草』に、間狂言について次のように記されている[30]。

當世ハ、間にこびたる事を云を、他に本とす。わが家にハ、能一番のあらまし、下々迄も、合点のゆくやうに、文字のこゑにて云ハあしゝ、よミにて、みゝちかきやうに云がならひ也……《中略》……先間ハ、十番が九番も、在所の、いやしき者か、山賤のやうなるたぐひなれば、是以其者の、相應に云事ならひ也、しかるを、去人、こびたる事をいひたがり、知者を頼、ばせをの間に、謡の抄にある、ほうげんこうが古事を云し事、智恵をかりたるしるし也

江戸中期の作である能〈藤〉の間狂言は、本説和歌の作者である縄麻呂について、典拠のある内容を語る。これは虎明の嫌う「こびたる事」で、「能一番のあらまし、下々迄も、合点のゆくやう」に教える解説役を担っている。おそらく虎明の時代の初期の間狂言は、もっと簡易な語りであったものと推測される。能作者の指定を受けたであろう間狂言の詞章も、狂言師が「知者」に知恵を借りたり、独自に創意を加えたりしながら、流動をしていたのである。

注

(1) 間狂言は能の一部であって能の研究の中でも扱われる。西村聡氏「作品研究『藤』」(二三頁『観世』昭和六十二年六月号、桧書店、昭和六十二年六月)では、この能が「間狂言の介在によって、かろうじて背景の本説が意識される」と論じられている。本稿ではその「背景」を鮮明にとらえたい。

(2) 田中允編『未刊謡曲集十八　古典文庫第二九二冊』古典文庫、昭和四十六年九月。

(3) 佐成謙太郎著『謡曲大観』第四巻、明治書院、昭和六年二月。

(4) 松浦静山著『甲子夜話続篇』(中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話続篇1』平凡社、一九七八年八月)に「この初春〔戊子〕宝生大夫が許に能(ノウ)を見に往しが、大夫は藤(フヂ)を為たり。これは外の坐に無き能(ノウ)なり。」という記述がある。

(5) 『明和改正謡本』(五番綴。二一〇曲)は、それまでの観世流謡本の詞章を大幅に改訂したもので、とりわけ異色の存在である。

この謡本を刊行したのは、十五世観世大夫元章であるが、極端な改訂は不評で元章の没後は旧に復した。能〈藤〉は同本が廃止後、関西以外では演じられず、江戸末期にそのままの形で現行曲に組み入れられた。

(6) 次官内蔵忌寸縄麻呂・巻第十九・四二〇〇（小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『万葉集4　新編日本古典文学全集9』小学館、一九九六年八月）。

(7) 西村聡著「作品研究『藤』」（二三頁『観世』昭和六十二年六月号、桧書店、昭和六十二年六月）。

(8) 夢幻能とは能の分類名で、「現在能」と対立して能を二大別する。超現実的存在の主人公（シテが神、故人の霊、物の精など）が、名所を訪れた旅人（ワキが僧侶や勅使）に、その地にまつわる物語や身の上を語るという筋立てを持つ。夢幻能の多くは前後二場に分かれ、同一人物が前場は人間の姿（化身）で、後場はありし日の姿（本体）で登場する。

(9) 間狂言は「アイ」とも言い、能の中で狂言方が演ずる芸や役のことを言う。最も一般的なのは、二場物の能で前シテの退場後、後シテの登場までの間をつなぐ役で、次の四つに分類される。

i　間語リ（語リ間）……シテの扮する役にまつわる物語を、ワキの問いに答えて語り聞かせる。

ii　立シャベリ間……ワキと没交渉で、名ノリ座で立ったまま独白形式で物語をする。

iii　末社間……主として脇能で、狂言方の扮する末社の神が、シテの扮する神の徳をたたえる。

iv　早打間……多く早鼓の囃子で登場し、事件の急を知らせる。

(10) 宝生系吉川本に出てくる「多枯の浦」や「田子の浦」は多祜の浦のことである。多祜の浦は越中国の歌枕で、現在の富山県氷見市上田子や下田子辺りと推定される。

(11) 紀貫之「ときはなる　まつのなたてに　あやなくも　かかれるふちの　さきてちるかな」（『和漢朗詠集』巻上・藤・一三六）。この歌は『貫之集』（第二・九九）や『続古今和歌集』（巻二・春下・一七二）などにも採られている。

(12) 藤原房実「たこのうらや　みきはのふちの　さきしより　うつろふなみそ　いろにいてける」（『後拾遺和歌集』巻二・春下・一五〇）。

(13) 『風姿花傳』「花傳第六花修云」（三七八頁、久松潜一・西尾實校注『歌論集・能楽論集　日本古典文学大系65』岩波書店、昭和三十五年九月）。

（14）注5。
（15）注4。
（16）能〈藤〉の作者について、明和二（一七六五）年に元章が著した『二百拾番謡目録』には日吉四郎次郎安清（後の佐阿弥）の名が挙げられている。しかし佐阿弥の活躍した室町中期の演能記録や謡本にこの曲名を見いだすことはできない。西野春男氏は『鷺流狂言伝書宝暦名女川本』の注記をもとに南部備後守信恩の作とするその伝えを信ずべき理由を考証した（西野春雄「享保前後の新作曲――近世謡曲史考――」、『能楽研究』7、一九八二年三月）。
（17）表章氏は『能之訓蒙図彙』（表章校訂、法政大学能楽研究所編『能楽資料集成10　能之訓蒙図彙』わんや書店、昭和五十五年八月）の解説で「筑波大学本」について、

筑波大学図書館蔵の江戸初期書写と認められる大蔵流間狂言本は、末尾に「西村弥三左衛門」と署名があった（所持を示すらしい位置）のを墨筆で抹消してあるが、その西村弥三左衛門の名が狂言之分の「村田平右衛門」の項にその師として見えている。『京羽二重』には「舟橋南通堀川東へ入」として彼の名が掲出されているから、貞享二年十一月には健在だったのが貞享四年四月には故人になっていたものと推測される。

と貞享年間以前の大蔵流台本であることを指摘している。
（18）田口和夫校訂、法政大学能楽研究所編『能楽資料集成15　貞享年間　大蔵流間狂言本二種』（わんや書店、昭和六十一年四月）。『能楽資料集成16　貞享年間　大蔵流間狂言本二種（続）』（わんや書店、昭和六十三年六月）。
（19）田口和夫校訂、法政大学能楽研究所編『能楽資料集成16　貞享年間　大蔵流間狂言本二種（続）』（わんや書店、昭和六十三年六月）。
（20）飯塚恵理人氏が「〔翻刻〕名古屋狂言共同社蔵　山脇和泉家伝来九冊組間狂言本（一）」（『名古屋芸能文化』第十三号、名古屋芸能文化会、平成十五年十二月）の解説で「『共同社本』は山脇和泉家に伝来し、和泉家家元であった佐藤清次郎氏から、井上礼之助師を通して共同社にもたらされた」と来歴を紹介している。また「奥書等はないが、内容から考えて現在知られている和泉流の間狂言本の中で最古に属する本ではないかと思われる」と記しているが、セリフの言い回しや本文の構成などから大蔵流の間狂言本だといえる。

(21) 北川忠彦著「初期間狂言の形態」(十二頁『国語国文』二三巻四号、中央図書出版社、一九五四年四月)。
(22) 「山脇得平本間之本」、通称「得平本」。江戸末期写。狂言共同社、佐藤友彦氏蔵。山脇藤左衛門家九世の山脇得平の手による。間狂言本詞章比較の底本として用いた。原本による。
(23) 「三宅庄一手沢本」、通称「狂言集成本」。江戸末期写。[翻刻] 野々村戒三、安藤常次郎著『狂言集成』(春陽堂、昭和六年七月)。
(24) 「森川杜園旧蔵本」、通称「森川杜園本」。推定寛政頃写。[翻刻] 佐成謙太郎著『謡曲大観』第四巻(明治書院、昭和六年二月)。
(25) 「真野町若林義太郎氏所蔵間狂言本」、通称「若林本」。上下二分冊で、表紙にはそれぞれ「鷺流間狂言上」、「鷺流間狂言下」の表題が付されている。二三二曲を所収。[翻刻] 佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。
(26) 「両津市安藤春雄氏所蔵間狂言本」、通称「安藤本」。安藤家所蔵の間狂言本は「間とワキ」、「間のみ」、「ワキのみ」の三種類がある。これらの間狂言本には表題が付されていない。本文最終丁に「明治三六年文月これを写す　持主恵比須町　安藤幸彦」とある。二〇一曲を所収。[翻刻] 佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。
(27) 「両津市天田保氏所蔵間狂言本」、通称「天田本」。和綴袋とじ一冊本で、表題は付されていない。筆者は三河湖翁で「明治四一年五月、七五歳の時に天田狂楽の乞いにより書写」とある。一八五曲を所収。[翻刻] 佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。
(28) 守大伴宿禰家持・巻第十九・四一九九(小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『万葉集4　新編日本古典文学全集9』小学館、一九九六年八月)。
(29) 注11。
(30) 大蔵虎明著「／二十一段」(一三六頁、笹野堅校訂『わらんべ草』、岩波書店、昭和三十七年八月)。

〔付記〕鷺流間狂言本の資料は、二〇一一年九月十一日に急逝された山梨大学の橋本朝生先生にご教示いただきました。ご教示に感謝申し上げますとともに、心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(コミュニケーション学部非常勤講師)

能〈藤〉間狂言本の記事別異同対照表

（一）書誌及び台本の分類

現在入手できる間狂言本の記事別異同対照表を、間狂言で語られる内容の時代や流儀による変遷を把握することを目的として作成した。比較表で用いた台本は次の通りである。簡単な解説とともに列挙する。《　》内は本文で用いた略称である。

和泉流

①山脇得平本間之本《得平本》江戸末期写。狂言共同社、佐藤友彦氏蔵。山脇藤左衛門家九世の山脇得平の手による。間狂言本詞章比較の底本として用いた。原本による。

②三宅庄一手沢本《狂言集成本》江戸末期写。［翻刻］野々村戒三、安藤常次郎著『狂言集成』（春陽堂、昭和六年七月）。

大蔵流

③森川杜園旧蔵本《森川杜園本》推定寛政頃写。［翻刻］佐成謙太郎著『謡曲大観』第四巻（明治書院、昭和六年二月）。

鷺流

④真野町若林義太郎氏所蔵間狂言本《若林本》上下二分冊で、表紙にはそれぞれ「鷺流間狂言上」、「鷺流間狂言下」の表題が付されている。二三二曲を所収。［翻刻］佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』（真野町教育委員会、平成十年二月）。

⑤両津市安藤春雄氏所蔵間狂言本《安藤本》安藤家所蔵の間狂言本は「間とワキ」、「間のみ」、「ワキのみ」の三種類がある。これらの間狂言本には表題が付されていない。本文最終丁に「明治三六年文月これを写す　持主恵比須町　安藤幸彦」とある。二〇一曲を所収。［翻刻］佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』（真野町教育委員会、平成十年二月）。

⑥両津市天田保氏所蔵間狂言本《天田本》和綴袋とじ一冊本で、表題は付されていない。筆者は三河湖翁で「明治四一年

五月、七五歳の時に天田狂楽の乞いにより書写」とある。一八五曲を所収。［翻刻］佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』（真野町教育委員会、平成十年二月）。

（二）凡例

一、間狂言本の記事別異同対照表は、『山脇得平本間之本』を底本とするものである。

一、対照表を作成するにあたり、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処置を施した。

1、文字遣いは底本通りとし、混用されている片仮名もそのままとする。

2、特殊な合字・連字体は通行字体に改める。

3、ト書き等は割注で記されることもあるが、すべて一行書きとする。

4、セリフが行間に補って書き入れてある場合、これを本文の該当箇所に入れて〔　〕で括って示した。ただし、それがセリフ以外の補足的な記述の場合は【　】を用いて示した。

一、読解の困難な文字は□（伏せ字）とした。

段の構成＼間狂言本名	和泉流		大蔵流		鷺流	
	①得平本〈藤〉	②狂言集成本〈藤〉	③森川杜園本〈藤〉	④若林本〈藤〉	⑤安藤本〈藤〉	⑥天田本〈藤〉
1―① アイの登場	藤	藤 アヒ　里人	狂言所の者。着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて仕手柱先に出で、	藤　六十四 腰明　長上下 少サ刀　扇持	藤	藤 腰明、長上下、 小サ刀、扇持

1―②	／是は越中の國田子の浦に住居する者にて候　能天気にて候間．浦へ出藤を眺めばやと存も．	1―③	や．是成お僧は此当りにては見なれ申さぬが．何方より御出有て此所にはやすらゐ給ひ候そ	2―① アイとワキの応対	ワキ／中々　シカ〳〵
／か様に候者は。越中の國多枯の浦に住居する者にて候。今日はよき天氣にて候間。浦へ出で藤を眺め。心をも慰まばやと存ずる。	や。これなるお僧は此の邊りにては見馴れ申さぬお僧にて候が。いづくより御出で候へば。此の所には休らうて御座候ぞ。	狂言「かやうに候者は。越中の國多祜の浦に住居する者にて候。今日は罷り出で。藤の盛りを眺め心を慰めばやと存じ候。	（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくより御出でなされ候へば。この所には休らうて御座候ぞ	2―②	シカ〳〵。
【居語通常】●是ハ越中の国多枯の浦に住者にて候。今日ハ能キ天気にて候間。多枯の浦に立いで。藤を詠め心を慰ばやと存ずる。	いや是成るお僧ハ此辺にてハ見馴申さぬ御方なるが。何とて此所にハ休らひ給ひたるぞ	●是ハ越中の国多枯の浦に住者にて候今日ハよき天気にて候間多枯の浦に立出藤を詠め心を慰めはやと存する。	いや是成お僧ハ此辺りにてハ見馴申さぬ御方なるか何とて此所にハ休ひ玉いたるぞ	2―③	ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か 狂言「なか〳〵このあたりの者にて候 ワキ「左様にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候
【居語通常】●是ハ越中国多枯の浦ニ住者にて候。此日ハよき天気なれバ。多枯ノ浦ニ立出藤を詠メ。心を慰ばやと存る。	イヤ是成お僧ハ。此辺にてハ見馴申さぬ御方なるが。何迚此所ニハ休らひ給ひたるぞ	〈是ハ都方より出たる僧にて候御身ハ此隣の人にて渡り候か〉 ●参ん候此隣の者にて候 〈左様に候ハゝ先近ふ御入候得尋度事の候〉	〈脇　是ハ都方より出たる僧にて候御身ハ此隣の人にて渡り候か〉 ●中々此隣の者にて候 〈脇　左様ニ候ハゞ近ふ御入候へ尋申度事の候〉		

2―④		＼心得申して候。さてお尋ねありたきとは。いか様なる御事にて候ぞ。	狂言「畏まつて候。（眞中に出で下に居て）さて御尋ねされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ		●心得申候扨御尋申度とハ何事にて候ぞ		●心得申候。偖お尋有度とハ如何様成御事にて候ぞ
2―⑤			シカ〳〵。	ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所は藤の名所の由承り及び候。とりわきこれなる松に交へる藤の。今を盛りと見えて候。これにつき様々子細ありげに候。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ	〈思ひもよらぬ申事にて候得共此所ハ藤の名所のよし承及ひて候取分是成松に交へる藤の今を盛と見へて候是に付様々子細有けに候御存に於てハ語つて御聞せ候へ〉		〈脇　思ひも寄らぬ申事にて候へ共此所ハ藤の名所の由承り及て候取分け此松ニ交へたる藤の今を盛と見えて候是ニ付様々子細の有げに候御存においてハ語ツて御聞かせ候へ〉
2―⑥	是は思ひもよらぬ事を承り候物哉。所には住居申せとも。委敷は不存候。去なから。始めて御目に懸りお尋有を何をも存せぬと申もいかゝなれば。古き人の申傳へたる通。御物語申さうずるにて候		＼これは思ひも寄らぬ事をお尋ね候ものかな。所には住み候へども。委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり。お尋ね候事を曾て存ぜぬと申すもいかゞなれば。古き人の申傳へたる通り。御物語申さうずるにて候。シカ〳〵。	狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左様の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語申さうずるにて候。			【常ノ通り有て】

3―①
アイの仕事・シテにまつわる物語

＼先此湖を不勢の湖と申候。又是成松に掛りたる藤を、田子の浦藤と申て名花にて候。夫に付田子の浦【多胡の浦】藤と申子細は、昔奈良御帝の御時大伴の家持の卿、越中の守にて御座有し時、此所へ御出有、様々御遊覧、の折ふし、此藤今を盛りと咲乱候を御覧有、春の名残をいとゝおもはせ給ひ御寵愛被成御酒宴有たると承りて候、去程に此藤の花是成汀に影移り、水底清く見へ候程に、一首の御詠歌に、

藤波の、影成海の底清み、しづく石をも玉と我か見る

＼語さる程に。此の湖をふせの海と申し候。又多枯の浦と申す仔細は。これなる松にかゝりたる藤を。多枯の浦藤と申す名花にて候。昔奈良の帝の御時。大伴の家持卿。越中守にて御座ありし時。此の處へ御出であり。様々御遊覧の折ふし。此の藤今を盛りと咲き亂れ候を御覧と咲き亂れ候を御覧あり。春の名残をいとゞ思はせ給ひ。御寵愛なされ。御酒宴ありたると承りて候。さる程に。此の藤の花。これなる汀に影映り。水底清く見え申して候程に。一首の御詠歌に。

藤浪の。影なる海の底清み。雫石をも玉と我れ見る。

まづこの水海を布勢の湖と申し候。又多祜の浦藤と申すは。これなる松にかゝりたる藤を多祜の浦藤と申し候。昔奈良の帝の御時。大伴の家持と申したる御方。越中の守にて御座ありし時。この所來り給ひ御遊覧の折節。これなる藤今を盛りと咲き申し候を御覧じ。花の名残をいとど思ひ。御酒宴のなされて候。さる程にこの藤の花。これなる汀にうつり。水底清く見え候間。その時一首の歌に。

藤波の影なる海の底清み。しづく石をも玉とぞわが見る

●先此湖を布勢の海と申シ。此隣を多枯の浦共申シ。又是成る松に掛りたる藤を。多枯の浦藤と申名花にて候。昔奈良の帝の御宇に。大伴の家持の卿。越中の守にて御座ありし時。此所へ御出あり て様々御遊覧の刻。折から此藤今を盛に咲乱れ。是成汀に影移り。水底清く候ひしかバ。春の残名を一入面白く御賞翫に思召。御酒宴を成され一首の御詠哥に。

藤波の影なる海の底清ミ。しつく石をも玉と我見る

●先此湖を布施の海と申此隣を多枯の浦と申又是成松に掛りたる藤を多枯の浦藤申名花にて候昔奈良の帝の御宇に大伴の家持の卿越中の守にて御座有し時此所へ御出有り様々御遊覧の刻折柄此藤今を盛りに咲乱れ是成汀に影移り水底清く候ひしかば春の名残を一入面白く御賞翫に思召御酒宴をなされ一首の御詠哥に

藤浪の影なる海の底清みしつく石をも玉と我見る

●先ツ此湖を布施（勢）の海と申シ。此隣を多枯の浦と申。又是成松ニ掛りたる藤を。多枯の浦藤と申名花にて候。昔奈良の帝の御宇に。大伴の家持の卿。越中守ニ御坐有し時。この所へ御出有て。様々御遊覧の刻。折柄此藤今を盛に咲乱れ。是成汀ニ影移り。水底清く候ひしかバ。春の名残を一入面白く御賞翫ニ思召。御酒宴を被成一首の御詠歌に。

藤浪の影なる海の底清ミしづく石をも玉と我見る。

3―②

3—③	と遊れければ、其時御供に候ひし奈和丸と申御方取あへす、	と遊ばされければ。其の時御供に候ひしなは丸と申す御方の取敢へず。	と。かやうに詠み給へば。御供にありし名和丸と申す人とりあへず。	と遊ハされたる実候。其時御伴ひ候ひし縄丸と申御方ハ。越中の亮にておわしけるが取敢ず。	と遊ハされたる実に候其時御伴ひ候ひし網丸と申御方ハ越中の亮にておわしけるが取敢ず	と遊バされたるげに候。其時御伴なひ候ひし網丸と申御方ハ。越中の亮にておわしけるが取敢ず。
3—④	田子の浦、底さへ匂ふ藤波を、かさして行む見ぬ人の為	多枯の浦。底さへ匂ふ藤浪を。かざして ゆかん見ぬ人の為	多祜の浦底さへ見ゆる藤波をかざして行かん見ぬ人のため	と読給ひしより。此所を多枯の浦とも。又多枯の浦ふし共申由承及ひて候。	多枯の浦底さへ匂ふ藤の花かさして行ん見ぬ人の為	多枯の浦底さへ匂ふ藤波を。かざして行ん見ぬ人の為。
3—⑤	と讀せ、給ひしより、此所を田子の浦と申し、夫より是成る藤を田子の浦藤と申習し候、	と。詠ませ給ひしより。此の處を多枯の浦と申し。それよりこれなる藤を。多枯の浦藤と申しならはし候。	と。かやうに詠まれたると申す。		とよみ玉ひしより此處を多枯の浦とも又多枯の浦藤とも申由承り及て候	と詠ミ給ひしより。此所を多枯の浦とも。又多枯の浦藤とも申由承り及て候。
3—⑥	しかのみならす家持の卿は、万葉集の作者と聞ゆる哥人にて御座候、	しかのみならず。家持の卿は。萬葉集の作者と聞こゆる歌人にておはします故。				
3—⑦	故其後代々の集にも、田子の浦ふじと讀たる哥、あまた有よし承り及て候、	其の後代々の集にも、多枯の浦藤と詠みたる歌は。數多ある由聞及びて候。	それより帝にも。多祜の浦と申す御歌數多く御座ある由承り候。			
3—⑧	誠に此藤は、しなゐ長く色深く御座候、昔こそ御賞翫も候へ、	誠に此の藤は。しなひ長く色深う御座候昔こそ。御賞翫も候へ。	誠にこの藤は餘の藤と變り。したえも長く色深く御座候により。盛りの折は見事に候へども。		誠に何国の藤よりもしなひ永く別して色深く。	誠二何国の藤よりもしなひ永く別して色深く。

3―⑨			國の事なれば誰見る者もなく候。	世々の集の歌人も数多詠置れたると申習由。	世々の集めの歌人も数多詠置れたると申習す	代々の集の歌人も数多詠置れたる由承る。
3―⑩	唯今は遠國の事なれは、誰見る人もなく候、か様の物語も、古き人の申傳たる斗に候	唯今は遠國の事なれば誰れ見る人もなく候。か様の物語も古き人の申傳へたるばかりにて候。		併遠国の事なれバ。誰有ツ（て）打続き詠ずる人もなく。毎年我等如きの見申迄にて	併遠国の事なれバ誰有つて打続き詠する人もなく毎年我等如きの見申迄にて	乍併遠国の事なれバ。誰有ツて打続き詠ずる人もなく。毎年我等如きの見申迄にて。
3―⑪	＼最前申如く委敷は存せす候へ共先我等の承り及たる通御物語申て候が扨お尋は如何様成御事にて候そ	最前申す如く。委しき事は存ぜず候へども。先づ我等の承及びたる通り御物語申して候が。さてお尋ねはいか様なる御事にて候ぞ。	まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候	委細の事ハ存せず候が古き者共の申傳る通りを。先物語り仕りたるが。何と思召てお尋ありたるぞ不審に存候	委細の事ハ存ぜず候が古き者共の申傳へ通りを先物語仕たるが何と思召て御尋有たるそ不審に存候	委細の事ハ不存候が。古き者共の申傳る通りを。物語り仕りたるが。何と思召て御尋被成たるぞ。不審ニ存候
3―⑫	シカ〳〵	シカ〳〵。	ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前これなる藤をながめ。古歌などを詠じ候處に。いづくともなく女性一人來られ、色々古歌などをよまれ。戯れを申され候程に。いかなる人ぞと尋ねて候へば。まことは藤の精といひもあへず。松の木蔭にて姿を見失うて候よ	〈近頃にて候懇に御物語候物哉尋申も余の義にあらす最前是成藤を詠め古哥杯を詠じ候處に何国ともなく女性壱人来られ色々古哥杯をよまれ戯れを申され候程に如何成人ぞと尋て候へハ誠ハ藤の精と言も敢へず松の木影にて姿を見失ふて候よ〉	〈脇　懇ニ御物語候者哉尋申事余の義ニあらず最前是成藤を詠め古歌杯を詠し候所ニ何国共なく女性一人来られ古歌杯を詠れ戯れを被申候程にいか成人ぞと尋て候へバ誠ハ藤の精ぞと言ひも敢ず松の木陰にて姿を見失ひて候よ〉	

4―①
アイの退場
（ワキの待受け）

＼是は奇特成事を承り候者哉．某推量仕るにお僧の御心中貴うましますにより御法を請佛果を得んと思ひ此花の精女と現れ　声言葉をかはしたると存候聞．

今宵は此所に御逗留有．有かたき御経をも御とくしゆなされ．重て奇特を御覧あれかしと存候

＼これは奇特なる事を承り候ものかな。某推量仕るに。お僧のご心中貴うましますにより。御法を受け佛果を得んと思ひ。此の花の精女と現れ。聲言葉を交したると存じ候間。

今宵は此の處に御逗留あり。有難き御法をも御讀誦なされ。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候。

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては藤の精人間と現れ。御物語致したると存じ候間。

暫く御逗留あり。草木成佛の御法をなし。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候

●是ハ奇特成事仰らる、物哉。当浦ハ代に隠れなき藤の名所なるに貴きお僧此辺へ御越成され。浦の気色を詠め給ひ。殊に此藤に心を付られたるにより。非精とハ申ながら此藤に限り。古へより様々哥にも詠み置れたる程の。名高き今に□せぬかつらなれバ佛果の縁をなし度存。仮に女と現じ。詞を替したると存する間。

暫く是に御逗留あり。草木国土悉皆成仏の御法を遊ハし。重て奇特を御覧あれかしと存ずる

●是ハ奇特なる事を仰らる、物かな当浦ハ世に隠れなき藤の名所なるに貴きお僧此辺へ御越被成。浦の気色を詠め玉ひ殊に此藤に心を付られたるに依非精とハ申なから此藤に限り古えより様々哥にも詠置れたる程□の名高く今に絶せぬかつらなれハ佛果の縁を印度存仮に女と顕じ詞を替したると存る間

暫く是に御逗留あり草木国土悉皆成仏の御法を遊ハし重て奇特を御覧あれかしと存する

●是ハ奇特成事を仰らる、物かな。当浦ハ世ニ隠れなき藤の名所なるに。貴きお僧の此辺へ御越被成。浦の気色を詠め玉ひ。殊ニ此藤ニ心を付られたるニ依。非精とハ申乍ら此藤ニ限り。古へより様々哥にも詠ミおかれ。今ニ名高きかつらなれバ。佛果の縁をなし度存。仮ニ女と現じ。詞を替したると存る間。

草木国土悉皆成仏の御法をあそバし。重て奇特を御覧あれかしと存る

4―③	シカ〳〵	シカ〳〵。	ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候		〈近頃不思儀成事にて候程に有難き御経を読誦し重ねて奇特を見うするにて候〉	〈脇　近頃不思義成事にて候間暫く逗留申有難き御経をも読誦し重て奇特を見うするにて候〉
4―④	／御逗留の間は我等お宿を参らせ候へし	／それは近頃にて候。御逗留候はゞ。我等お宿をまゐらせ候べし。	狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ		●尤に候御用の事も候ハ、我等へ御申候へ	●御用の事もあらバ被仰候へ
4―⑤	シカ〳〵	シカ〳〵。	ワキ「頼み候べし		〈頼み候へし〉	〈脇　頼ミ候べし〉
4―⑥	／心得申て候	／心得申して候。	狂言「心得申して候といひて狂言は引く。			